年間を通した環境教育と国際理解教育の取り組み

── 修学旅行の計画と実践をもとにして ──

前ジョホール日本人学校　教諭
鹿児島県鹿屋市立鹿屋小学校　教諭　福　森　真　一

キーワード：修学旅行，国際理解，環境教育，熱帯雨林，森林伐採，パームヤシ農園，広報活動

１．はじめに

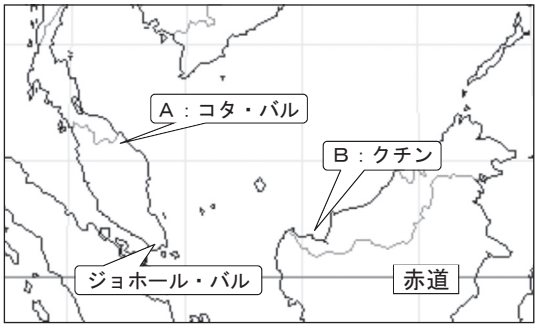
マレーシアは今年で独立54周年を迎えた若い国である。人口約2800万人の内，マレー系（約60％：イスラム教）・中華系（約30％：仏教・キリスト教）・タミール（インド）系（約10％：ヒンドゥー教）の３つの民族で構成される多民族国家である。時にはお互いに相容れることができない宗教観念・生活習慣をもちながら，民族間の紛争はほとんどなく，平和な国家をつくり上げている。それはお互いに宗教が異なることを認め合い，敏感なところには目をつむり，逆に多文化であることに誇りをもち，それを特色として一つの国をつくっていこうとする姿勢をもっているからであり，頭が下がる思いである。世界平和・国際理解のモデルともなりうる国であると考える。また広大な熱帯雨林をもっている国でもあり，同時に野生生物が絶滅の危機にさらされている国でもある。

２．実践

2008 ～ 2010年度の３年連続で小学部第６学年の担任を務めることとなった。６学年の大きな行事となれば，やはり修学旅行である。ジョホール日本人学校の修学旅行の企画運営と2010年度の実践について述べたい。

(1) ジョホール日本人学校小学部修学旅行の目的地

５・６年生合同で実施するため，Ａ・Ｂ年度の２ルートを設定しており，ルート・内容は当該学年で企画している。マレーシア国内には，世界文化遺産に登録されている「マラッカ（半島マレーシア）」をはじめとする歴史的に価値のある場所や，世界自然遺産に登録されている「グヌン・ムル（ボルネオ島）」などの素晴らしい自然があるが，この３年間は教育的価値を考慮し，Ａ年度「コタ・バル方面（半島マレーシア北東部：クランタン州）」とＢ年度「クチン方面（ボルネオ島：サラワク州）」の２ルートを設定してきた。



＜Ａ年度「コタ・バル方面」のもつ価値＞

コタ・バルは1941年12月８日，真珠湾攻撃よりも１時間50分早く上陸作戦が始まった場所であり，太平洋戦争のもう一つの開戦地ということになる。コタ・バル飛行場には今でも，日本軍を迎撃したトーチカが残されている。この地には戦争博物館があり，豊富な写真資料によって日本軍の攻撃や占領時の様子，終戦，そしてマレーシアの独立に至る経緯を知ることができる。またマレー作戦で実際に日本軍によって使われた銀輪部隊の自転車や機関銃，捕虜を使役して建設した鉄道の一部などが資料として展示されている。この地は住民の80％以上がマレー系住民であり，スルタンと呼ばれる王によって統治されてきた歴史をもつ。民族の歴史や王族の暮らし，工芸品の歴史などを展示した博物館が集まった文化地区には，現代の人々の生活を支えるパサ（市場）もあり，マレー民族の歴史・文化・生活に触れることができる。

(2) 修学旅行の準備

① 事前視察

安全で充実した修学旅行にするためには，事前視察が大切である。事前視察のポイントとして以下の項目を挙げて下見に取り組んだ。

また，修学旅行を引率する５・６年担任だけでなく，修学旅行の引き継ぎも兼ねて，小学部学級担任から視察への希望者を募り，より多くの目で

安全性や行程，学習できる内容の確認を行った。移動・宿泊・ガイドの手配は，現地旅行会社を通じて行った。修学旅行での学習の充実は，日本語ガイドにかかっている部分も多く，優秀なガイドの確保を要望した。

② 事前学習

修学旅行では，個人ではなかなか体験することができない内容を設定する必要がある。現地に行って体験するだけでも価値はあるが，事前に充実した学習をしておくことで，修学旅行の価値をさらに高めることができる。そのため事前学習を大切にしてきた。以下，2010年度の実践である。

＜事前視察のポイント＞

① 安全性のチェック
- ○ 活動の安全性
  - ・活動単位は？（グループ・全体・個人？）
- ○ 場所の安全性
  - ・暗がり，死角，浮浪者？
  - ・ケガの発生しそうな場所は？
- ○ 緊急対応
  - ・急病，事故，ケガ発生時の対応は？
  - ・搬送先病院の確認
- ○ 移動の安全性
  - ・移動手段は？ 交通量は？
- ○ 宿泊地の安全性
  - ・避難経路の確保は？
  - ・ホテルのセキュリティは？（不審者侵入対策がなされているか？）
  - ・部屋同士の電話での通話が可能か？（緊急連絡用）
- ○ 現地の対日感情は良好であるか？

② 衛生面のチェック
- ○ トイレの確認
  - ・水は流れるか？ 衛生的か？ 数は？
- ○ 手を洗えるか？

③ 食事面のチェック
- ○ 児童が食べられるものか？

④ 場や活動の価値のチェック
- ○ 何を発見し，何を学べるのか？
  - ・有効に学ぶには，どんな準備が必要か？
- ○ 入場料・営業時間帯・必要な物

⑤ 移動にかかる時間と活動時間のチェック
- ○ 移動手段の接続の確認

(3) Ｂ年度「クチン方面」の実践（2010年６月）

2008年度に引き続き，修学旅行の目的地を「クチン」とした。2008年度は豊かな自然に出逢うことをとおして，自然を守る意識を高めたが，2010年度はさらに事前学習の段階から環境問題に焦点化し，マレーシアが抱える世界的な環境問題に正面から取り組むことを目的とした。

① 事前学習

事前学習はインターネットを用いて「マレーシアにおける環境問題（森林伐採）の現状」を調べた。下の一覧は，見つけた情報を子どもたちが分類し，まとめたものである。

熱帯雨林を取り巻く様々な問題

地球温暖化と熱帯雨林	○ 二酸化炭素などの温室効果ガスが増えて，地球温暖化が進んでいる。 ○ 地球温暖化が進むと，海面の上昇，異常気象，気候の変動などの災害が起こる。 ○ 熱帯雨林は，大量の二酸化炭素を吸い込み，酸素を生み出している。 ○ 熱帯雨林を壊すことは，二酸化炭素を増やすことにつながっている。
森林伐採（その１）木材として	○ 日本は熱帯雨林の木を大量に輸入している国である。 ○ 熱帯雨林の木を切って，木材として売ることで生活している人がいる。
森林伐採（その２）パームヤシ農園をつくるため	○ パームヤシ農園は熱帯雨林を大量に切り開いて作られている。 ○ 日本に輸入されるパームヤシの油（パームオイル）の90％はマレーシア産である。 ○ パームオイルは世界中の人々の生活で使われており，必要とされている。 ○ パームヤシ農園で働いて生活している人々がいる。
先住民族のくらし	○ 昔ながらの生活をしたい先住民族の人々がいるのに，それができない。 ○ 先住民族の人々には昔ながらの焼き畑農業を続ける権利がある。
熱帯雨林の価値	○ 熱帯雨林は豊かな生物の宝庫である。 ○ 薬の多くは熱帯雨林の植物から作られている。 ○ 絶滅しそうな貴重な動物・植物がある。

これらのことをもとに子どもたちは，「どうすればすべての人々が幸せに生活し，しかも環境が守れるのか」ということを考えたが，この時点では答えは出なかった。ただし「とにかく激減している熱帯雨林をなんとかしたい」という子どもたちの意見から，修学旅行中に植林活動を行うことが決まった。考えがまとまらないまま修学旅行へ出発したことで，逆に修学旅行中の環境についての意欲は継続したように思う。

② 主な活動内容とその様子

日程	活動内容	活動の様子
一日目	森林保護区での植林活動	○ 原生林と同じ種類の木を植林した。植林に際しては今後，森の世話をしてくださる先住民族であるイバン族の方々にお手伝いいただきながら一緒に植林することができた。「あの人達がお世話をしてくれるんだね」という言葉も聞かれ，放置されない安心感をもつことができた。 ○ 先住民族の方々から自分たちの植林が，失われつつあった森の一部になり，動物も人も助けることになると聞き，誇らしく感じていた。 ○ ５年で背丈を超え，15年で立派な大木になるという話に「森になったところを見てみたい」「いつかまた来たいね」と口々に話していた。 森林保護区に植林する
二日目	サラワク文化村見学	○ サラワク州の先住民族の文化を集めた博物館で，子どもたちは先住民族の生活には原生林そのものも，そこで捕れる動物も欠かせないものであったことに気付くことができた。 ○ 子どもたちは楽器，音楽，踊り，模様，衣服，建物の造り，遊びなどから，サラワクの地に独特の文化があったことに気付き，その素晴らしさを感じていた。
	バコ国立公園でのジャングル・トレッキング	○ うっそうと茂る熱帯雨林の中を，ガイドから一つ一つの木にそれぞれの役割があることを聞きながら歩くことができた。 ○ この地域にしか生息していない野生のテングザルとも出会い，観察することができ，この自然を残していかなければならないことを実感していた。 森の話を聞く

③ 修学旅行を通して

○ テーマを環境問題（森林伐採）に絞った結果，活動目的にも内容にも筋が通り，子どもたちの意識もぶれることなく，環境問題に浸ることができた。

○ 現地の人々が熱帯雨林を守る活動に取り組んでいることが分かり，子どもたちの現地理解が深まった。

○ 森を必要としている先住民族の人々と一緒に植林をすることができ，知識であった森林伐採が子どもたちの身近な問題へと変化していった。

○ ガイドからの「学んだことを１人が10人に，10人がさらに10人に…というように伝えていくことが大切。皆さんの知ったことを広げていってほしい」という熱い言葉に子どもたちが感銘を受けていた。

(4) 修学旅行後の広報活動

ガイドの話を受け，自分たちの役目を「広報活動」であると考えた子どもたちは自主的・積極的に活動に取り組んでいった。

① ペスタ・クラパ（校内文化祭：10/3）での発表

「修学旅行で学んだことを劇にして他の学年・保護

＜ガイドの話や調査したことから＞

サラワク州はマレーシアの国土の３分の１を占めるほど広大な土地であり，以前は熱帯雨林の原生林に覆われていた。しかし近年は森林伐採が進み，原生林は国立公園や保護地域として指定されている地域に５～10％しか残っていない。

伐採された熱帯雨林の輸出先は先進国であり，サラワク州で伐採された熱帯雨林の60％は日本へ輸出されている。また近年は広大な熱帯雨林が焼き払われてパームヤシ農園へと姿を変えており，現在マレーシアの国土全体の10数％がパームヤシ農園である。パームヤシから取られるパームオイルは多様に利用ができるオイルであり，チョコレート菓子類，カップ麺，チップス系の菓子等の食用品から，バイオ燃料にまで幅広く使われている。日本の植物性油の60％はパームオイルである。廉価であるため，発展途上国の食用油として必要不可欠である。なおこのパームオイルからは，環境や人に優しい洗剤も作られている。パームオイルとその製品はマレーシアの輸出額の２位に位置しており，マレーシア政府はパームヤシを国の基幹産業として位置づけている。それはパームヤシを50RM札の図柄にしていることからもうかがえる。

原生林が減った結果，熱帯雨林を住みかとしてきた動物も激減している。ボルネオ島に生息するオランウータンは100年前の10％にまで減少しており，2050年を待たずに絶滅するのではないかと言われている。

者・日本人会の皆さんに伝えたい」という子どもたちの思いから「お願い助けて～ Save The Rain Forest ～」と題して劇を行った。内容は修学旅行でクチンに行った 6 年生が，環境問題に直面し，「パームヤシ農園で働く人」「先住民族」「野生生物保護センターの人」そして「日本人としての自分」といった異なる立場の間で悩むという内容である。「パームヤシ農園で生計を立てる権利」「自然が失われたために絶滅の危機を迎えている野生動物・野生植物の存在」「昔ながらの生活ができなくなった先住民族の存在」「熱帯雨林から恩恵を受ける自分たち」「パームオイルの恩恵を受ける自分たち」それぞれの立場から考え，すべての人々が共生していくための解決策を考えた子どもたちは劇の最後に，自分たちが必死に考えた今から自分たちにできることを述べた。そして熱帯雨林を守るための募金を呼びかけ，実際に会場出口で募金活動を実施した。「そんなことがあるとは知らなかった」「そんなに危機的な状況にあるんだね」「日本の責任もあるね」「教えてくれてありがとう」といった保護者や日本人会の方々の声とともに多額の募金が集まった。これは日本マレーシア協会の「オランウータンの森基金」に寄付することとなった。

② 寛柔Ⅳ小との国際交流（10/21）

中華系の小学校である寛柔Ⅳ小の 6 年生を迎えて国際交流会を行った際には，文化交流の他に森林伐採についての英語によるプレゼンテーションを行った。子どもたちは中華系の子どもたちが環境問題を知っていたことを喜び，お互いにこれから自分たちがしたいことを伝え合い，交流を深めることができた。

③ スリアラムⅠ校との国際交流（11/1）

マレー系の小学校であるスリアラムⅠ校の 6 年生を迎えて国際交流会を行い，この会でもプレゼンテーションを行った。しかしスリアラムⅠ校では，環境教育への取り組みがなく，初めて聞くことにただただ驚いていた。「これは皆さんの国のことだから，これからも興味をもってほしい」という子どもたちの願いを深刻に受け止めていた。

ペアで説明する

④ ＪAGAM 30th 記念パーティー（11/26）

ＪAGAM（日本マレーシア留学生協会）の創立30周年記念パーティーに和太鼓の出演依頼があった。その際主催者側に環境問題に取り組んでいることを説明した。その後思いがけずいただいた謝礼の使い道について子どもたちが話し合った結果，再度「オランウータンの森基金」へ募金することになった。

⑤ 山口県立大津高校来校（1/17）

山口県立大津高校の 2 年生が修学旅行で来校した際も，6 年生は環境破壊についてのプレゼンテーションを行い，環境破壊を話題にした交流を行い，高校生の考えを聞くことができた。

３．成果と課題

(1) 成果

○「一つの問題に対していろいろな立場の人がいる」ということ，そして「すべての人（動植物も含めて）が幸せになるような方法を考えていくこと（共生）が大切である」という考え方ができるようになったことは，子どもたちのこれからの人生において大きな糧になると考える。また1 年を通じて環境問題に関わり続けたことはきっと子どもたちの心に残り，これからの人生でも環境保全を意識していくことが期待できる。

○ 事前調査・事後の活動を念頭に修学旅行を計画することで，より価値ある修学旅行になった。

(2) 課題

○ A年度「コタ・バル方面」での戦争に関する内容をどう深めるかが課題である。